

国語科授業におけるシティズンシップ教育の試み

ーフォト・リテラシーの授業実践ー

江頭双美子

(東京大学教育学部附属中等教育学校・国語科)

1 はじめに

イギリスのシティズンシップ教育を方向付けたとされる、バーナード・クリックによる1988年のイギリス政府答申「学校における民主主義とシティズンシップの教育 (Education for citizenship and the democracy in schools)」でクリックは、シティズンシップを構成する要素として「社会的道徳的責任」「共同体への参加」「政治リテラシー」の3つを挙げ、その中でも特に「政治リテラシー」を重視している。日本の中等教育学校においてこの「政治リテラシー」を養うシティズンシップ教育を行うとすれば、社会科や公民科での実践が一般的であろう。実際、社会科や公民科の授業では、シティズンシップ教育として位置づけられるような、模擬投票や模擬裁判などの実践や現実社会における様々な問題について考える授業がこれまでも多く行われている。しかしながら、「政治リテラシー」をもう少し広い意味で捉えるならば、政党や政治家の発するメッセージや出来事の様態の意味するところを批判的に読み解き、一人の市民として自己の考えを表明する能力もその一つであると言えないだろうか。そのような広い意味での政治リテラシーを育成するという観点から考えるならば、国語科の授業においてもシティズンシップ教育を実践することが必要であると考えられる。

では、国語科の授業でこのような「政治リテラシー」を養うシティズンシップ教育を行うとすればどのようなことが可能か。本稿は、そのような問題意識で取り組んだ国語科における授業の実践記録である。

従来の国語教育の中でシティズンシップ教育に最も近接したものの一つに、メディアリテラシー教育がある。メディアリテラシーの授業としては、新聞記事などを素材としながら、そこに書かれている記事の内容を分析したり、批判したりする活動はもちろんのこと、最近では情報の発信活動を体験する中でメディアについて学ぶ実践なども行われており、幅広い実践が試みられている。ⁱ

言うまでもなく国語教育の目標は言語能力の育成であるため、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を中心に行われている従来の国語教育の中にメディアリテラシーを位置づけるとすれば、それは言語テキストを対象としたものとなりがちである。しかしながら、現代社会におけるメディアは、言語テキストだけで成り立っているものではない。テレビや映画などの映像はもちろん、新聞においても重要な記事には必ずといってよいほど写真が掲載されており、それらの写真が記事の内容の印象を大きく左右することも少なくないのである。にもかかわらず、そうした写真がどのような意図で選定されどのような意味を生み出しているのかについて考えること、即ち「写真を読む力」については、これまでの教育ではあまり注目されて来なかった。

小林美香は、第一次世界大戦期のヨーロッパで多く制作されたイラストによるプロパガンダポスターを下地として、第二次世界大戦期に写真がプロパガンダに利用されてきたことを指摘している。1920年代から30年代にかけて写真機材が革命的な発達を遂げ、新聞やグラフ雑誌などのメディアが成立すると、写真はメディアの中で重要な位置を占めるようになっていったという。中でもグラフ雑誌は、フォト・ストーリーという手法を用いて大衆に強く訴えかける力を発揮し、第二次世界大戦期には「ニュース記事の中で戦況を報道するだけでなく、戦争遂行のために読者の思想を方向付ける役割、すなわちプロパガンダとしての役割を担うようになった」。ⁱⁱ

プロパガンダといえば、ナチス・ドイツによる映像の利用が有名であるが、それだけでなくアメリカやヨーロッパにおいても写真を始めとする視覚的情報によって大衆を操作しようとする動きが広く行われていたのである。

また、鳥原学によれば、日本でも同じ時期に陸軍の要請で日中戦争勃発後の中国国内に親日的な世論を醸成するためのグラフ誌が創刊されたり、報道写真を利用して国民への国策浸透を図ったりすることが意図的に行われていたという。ⁱⁱⁱ

さらに、フォト・ジャーナリストの新藤健一は、戦後も写真の改竄や修正によって多くの真実が歪曲されたり、写真のイメージが政治的に利用されたりした事例を多く指摘している。^{iv}

このように、写真が歴史的に政治的に利用されてきたことは紛れもない事実であると言いつてもよい。現在も写真が各種メディアの中で大きな意味を担っていることを考えると、無意識なイメージ操作に利用されかねない写真を批判的に「読む」力を養うことは、「政治的リテラシー」の向上にとっても必要であるものと考えられる。

今橋映子は、『フォト・リテラシー』^vの中で、こうした写真の歴史を踏まえつつ「フォト・リテラシー」という語を初めて使い、写真の持つ政治性について詳述している。その序において、鈴木みどりによる「メディアリテラシー」の定義^{vi}によりながら、「フォト・リテラシー」という言葉を「市民が写真メディア（特に現実を報道する役割を担う写真）を、芸術史のおよび社会的文脈の双方でクリティカルに分析し、評価出来る力、延いてはその知識と倫理をもって、一方で歴史認識を精練し、他方で現在における多様なコミュニケーションを作り出す力」と明確に定義した。

それは、現実社会におけるコミュニケーションを支える広い意味での読解力であるとも言え、こうした力を養うことは、国語教育の実践としても意味をもつものとなるだろう。そのような問題意識から、シティズンシップ教育の観点で「フォト・リテラシー」の授業をデザインすることとした。

実践にあたっては、最初に、教育出版の教科書『伝え合う言葉 中学1年』の中の単元「メディアリテラシー入門」にある、「写真と言葉が生み出す世界」という教材を用いることで写真の持つ力に自覚的になることから始め、次に、新聞記事に用いられている写真を分析することで、写真がどのような意図で選定され、どのような効果を上げているのかを考える授業を行った。

その上で、最後に、現実の政治に用いられている写真（2013年7月に行われた参議院選挙で用いられた各政党の写真）に注目し、写真を読み解く力（広い意味での読解力）を養うことを目標とした授業を行った。

対象は、筆者が担当した 2012 年度の中学 1 年生、2013 年度の中学 2 年生の生徒 3 クラス 120 名である。政党の写真分析については、2013 年度に担当した高校 2 年生の生徒 1 クラス 40 名を対象としても授業を行った。後に述べるように、この授業では、高校 2 年生の方が中学 2 年生よりも政治に関する知識を用いた精密な分析を見せたが、2 回に渡る分析経験から学んだ手法を念頭においた発言が中学 2 年生には見られたのに比して、高校 2 年生には同様の指摘が出なかったことから、一定の教育効果が得られたものと感じられた。以下にその概要について報告する。

2 単元「メディアリテラシー入門」――「写真と言葉が生み出す世界」（教育出版『伝え合う言葉 中学 1 年』）を用いた授業

(1) 対象生徒：中学 1 年生 3 クラス（1 クラス男 20 名 女子 20 名の 40 名）

(2) 教材の概要

まどみちおの詩「ボタン」を 4 種類の写真と組み合わせたものが教科書に掲載されている。まどみちおの詩「ボタン」とは次のようなものである。

ボタン まどみちお

ボタンを
しっているから ボタンなのだ

ボタンに
つくられているから ボタンなのだ

ぼくたち
にんげんに とって…

せかいで 一ばんみじかい
トンネルを
でたりはいたり するのが
しごとの…

で なになのだらう ボタンは
ボタンに とって……
宇宙に とって……

教科書に掲載された 4 つの写真は以下のようなものである。

- ① ボタンを針と糸で縫い付けている写真を背景に詩が書かれているもの
- ② 真っ暗な空に月が画面一杯に映っている写真を背景に詩が書かれているもの
- ③ 暗いトンネルの中から撮影した、出口に 4 人の子どもが立っている写真を背景に詩が書かれているもの
- ④ 少年の目がじっとこちらを見つめている写真のすぐ下に詩が書かれているもの

①は詩の題名である「ボタン」の写真、②③は詩の中にある「トンネル」「宇宙」といった語を想起させるような写真、④は「ぼくたち」という詩の中の一人称を感じさせる写真が選ばれていることがわかる。

教科書には、これらの写真を提示しながら「文字で書かれた詩や文章が、写真という異なる表現方法と一緒にになると、どんな化学変化が生まれるか、体験してみましよう。」という言葉が添えられている。国語の授業で写真を扱うに当たり、ことばと写真の融合がもたらす表現効果を学ばせることを目標として設定された教材であることが

この言葉から読み取れる。本授業では、特に「写真」に焦点を当て、写真が言葉に添えられることでどのような変化が感じられるかを考えることとし、「写真が持つ効果」について意識的になることを目標とした。

(3) 授業の流れ

- ① 最初に、詩だけを書いたワークシートを配布し、「この詩がどんなことを言おうとしているか」個人で考えさせた。
- ② 教科書の4つの写真と組み合わせたものを見ながら、写真が組み合わせられたことによって、詩の内容がどのように違って感じられるか班で考えさせた。
- ③ 各班で考えたことを発表させながら、写真にはどのような力があるかをクラス全体で考えさせた。
- ④ 全体での意見を参考にして、「写真にはどのような力があるか」を個人でワークシートに記入させた。

「せかいで 一ばん短い トンネルを でたりはいったり するのが しごとの……」という表現が詩の中に見られるが、この表現は、ボタンがボタンホールを「でたり はいったり」することを示している。しかし、針と糸をボタンの穴に通そうとしている1枚目の写真と組み合わせたものを見た生徒の何人かは、この「トンネル」がボタンホールではなく、糸を通す穴であると誤読してしまった。また、月の写真を背景にすることで、この詩が「ボタン」という具体物について表現しているのではなく、人間の作り出したモノが宇宙にとって持つ意味とは何かというような哲学的な問いを提示している詩であると感じられたという発言も見られた。

こうした発言を教室全体で共有する中で、時には写真によって言葉の意味がゆがめられる可能性があること、写真によって言葉の持つ意味や考えの主題が異なって感じられるようになる、などの効果が指摘された。

(4) 生徒のワークシートから

生徒が記入したワークシートを見たところ、写真の効果については、「写真が考えを広げてくれる」「写真によって考える方向が限られてしまう」「写真によって新しい意味が付け加えられる」などの記述が、どのクラスでも見られた。以下に、その中から1つの事例を紹介する。(①・②・④は、(2) 授業の流れの①～④を、②の①から④は(1)の写真の番号を表している)。

- ①
 - ・ 人間がどれだけ小さな存在かということ。
 - ・ 視点を変えればボタンも違うものに見えること。
 - ・ 違う視点で見ると、そのものも変わってくるということ。
- ②
 - ①
 - ・ ボタンの写真があることで詩を読んでボタンを見ながら想像することができる。
 - ・ 針も写真の中にあるので、針からボタンを見たらどうなのか、という考えもできる。
 - ②
 - ・ ボタンや人間がとてもちっぽけなものに感じられる。
 - ・ ボタンと同じ丸い形の月が宇宙にとってのボタンなのかとも感じられる。
 - ・ ボタンが月を見てる、という解釈もできる。

- ③ ・ トネルの写真が、人間がボタンになったときの気持ちを連想させる。
- ④ ・ もしかしたらボタンから見た世界を写した写真なのかとも思う。
- ④ ・ 読者の考察の助けとなることができる。
- ・ 写真の印象が言葉の印象を変えてしまうことができる。

3 プロパガンダに利用された写真について知り、現代の新聞における写真の役割について考える授業

『歴史写真のトリック』という本がある^{vii}。この本には、レーニン、スターリン、ヒトラー、毛沢東など多くの政治家が写真を修正・改竄して政治的に利用した例が多く掲載されている。本書に掲載された写真を手がかりにして、写真による演出効果を生み出す技術について考えさせる授業を行った。

修正、背景の塗りつぶし、切り抜き、トリミング、抹消など、現在見るとかなり露骨な方法を用いて政治的に利用されてきた写真の実例を知ることは生徒の興味を引き出すために有効であると考えてのことである。同時に、そうした過去の写真を参考にしながら、写真の撮影される角度や明るさなどの技法が写真の印象に与える影響について考察することで、現代の写真を批判的に読む力を養うことが出来るとも考えた。

(1) 対象生徒：中学1年生 3クラス (1クラス男20名 女子20名の40名)

(2) 教材の概要

① 『歴史写真のトリックー政治権力と情報操作』より

(ア) ヒトラーの肖像写真

ドイツ全土にプロパガンダのために配信されたヒトラーの肖像写真の元になったとされる、ハインリヒ・ホフマンによる写真(左)と、1932年にハインリヒ・ホフマンによって発行された『知られざるヒトラー』という写真集の中の一枚(右)を比較させた。

左の写真は、顔や手のポーズ、服装などを修正され、「1民族、1帝国、1人の総統！」などといった文字が足されてより力強い写真として配信されたが、授業ではそうした加工がなされたことは口頭で説明するにとどめた。

右の写真の載っていた『知られざるヒトラー』は、ヒトラーが政権奪取後に書店から回収され、再版が禁止されたという。「いい歳をして半ズボンをはいている姿」が「世界を震わせている国家元首の威厳と両立しないように、彼には思えたのだ」と著者のアラン・ジョベールは書いている。





左は、1919年に赤の広場で演説していた時のレーニンの写真である。ガラスの陰画原板が割れてしまっているが、この写真を元に、周囲が塗りつぶされて街灯や人が消去され、レーニンだけがクロス・アップされて右の写真が作られた。

下から見上げるように撮影されたアングルが印象的である。「下から見上げて写した迫力のある画像なので、ソヴィエト連邦でも世界中の他の多くの諸国でも、ポスターや合成写真の作成者によってのちのちまでふんだんに利用されてきた」と、書かれている。

(ウ) チャーチルの軍事基地の視察写真

左は、イギリスの新聞に掲載された軍事基地を視察するチャーチルの写真である。これは、「首相は戦争努力へのいっさいの貢献に関心を抱いている」ということを伝えるための宣伝画像として用いられたものである。それを、敵国のドイツが、シルエットを切り抜いて壁の陰に隠れて見えるような背景に置き、さらには首を傾けさせて、「ヘッケンシュッツェン（狙撃兵）」という言葉が添えたものが右の写真である。これと同様の写真が、ドイツ軍の飛行機によってイギリス上空からばらまかれた。このポスターを見た人々はこれを本当とは思えないものとして読み取ったが、同時に「チャーチルはずるくて、悪賢くて、物騒な奴だ（「あいつは紳士でさえない」ーヒトラーはそう言っていた）」という「暗黙の報知」を解読したと、アラン・ジョベールは述べている。



2 山中伸弥氏のノーベル賞受賞を報道する新聞記事

山中伸弥氏がノーベル賞を受賞したことを報じた、左から朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の2012年10月9日の朝刊。朝日新聞と読売新聞が「教授」としているのに対して、毎日新聞だけが「山中伸弥氏」としており、大学を連想させる「教授」ではなく山中氏個人に与えられたという印象が強い。小見出しも、朝日が「日本という国が受賞」、読売が「まだ仕事は終わっていない」という山中氏のコメントをつけ、個人の手柄を褒め称えるという印象が薄い。それに対して、毎日新聞だけは「医学生理学賞日本人 25年ぶり」と賞賛する言葉を添えている。こうした記事の方向性を象徴的に表しているのが写真の表情であ

る。毎日新聞のものだけが笑顔で最も大きく色も鮮やかであり、朝日は写真の色が薄く小さい。読売は写真が大きいものの、厳しい表情をしているのが印象的だ。



③ オバマ大統領再選を報道する新聞記事



左は読売新聞 2012 年 11 月 7 日夕刊、右は朝日新聞 2012 年 11 月 8 日朝刊である。左の記事は、選挙結果を伝えるものであり、オバマ大統領が強い日差しの下でまぶしそうに顔をしかめている写真と、その勝利をたたえる支持者の写真を組み合わせている。このオバマ氏の表情は、遠くから見ると口の形から笑顔に見えてしまうようだった。生徒の発言では、「勝利を喜んでいる」というものが多く見られたのはそのためであろう。できれば、近くで見られるように班ごとに 1 枚配布すべきであった。

右は、オバマ氏の勝利演説の内容を伝えるものである。ここで用いられている写真が、真っ黒な背景で下から見上げるような角度で撮られていることによって、オバマ氏の威厳を演出しているとも受け取れる。ヒトラーの肖像写真やレーニンの演説写真を念頭に分析するのにふさわしいと判断して、教材に選んだ。

(3) 授業の流れ

- ① プロパガンダ写真 (ア) ~ (ウ) の提示と説明、及びその分析をクラス全体で行った。
- ② 山中伸弥氏のノーベル賞受賞を報道する新聞記事の検討を、クラス全体で行った。
- ③ オバマ大統領再選を報道する新聞記事の検討を班ごとに行い、クラス全体で共有した。
- ④ 写真の持つ力について個人で記述させた。

以上の流れの授業を 1 時間で行ったが、できれば 2 ~ 3 時間確保したいところであった。時間の関係で、議論が盛り上がったところで次の段階に進めざるを得なかったのが残念である。しかし、生徒達の反応は大変よく、様々な意見が出されて写真を読む力が身についたものと感じられた。

(4) 生徒のワークシートから

この授業で生徒が書いたワークシートのコメントを見ると、授業者の意図をしっかりと理解し、各自が様々に写真についての考えを深めていることがわかった。以下に、「写真にはどんな力があるだろうか」という問いについて生徒が書いたものの中からいくつかを紹介する。

- 少しの変化で写る人のイメージが変わる。色味を変えると内容・時間・雰囲気などが変わる。(青が多い⇒冷たいイメージ・かたい感じ 赤が多い⇒健康なイメージ・情熱 黄色い⇒夕刻・光のイメージ・うれしさ)
- 写真を使うことによって深くまで考えることができる。だが、使い方、光のかげん、文によって印象を変えてしまう。すごいけどおそろしい力を持っている。一瞬の行動、すばらしい所を取り上げることができる。
- そのことへのイメージを変える力。どんなことなのかわかりやすくする力。色などで明るく(喜)や暗(真剣)なことを表せるとわかった。
- 同じことを書いていても写真の映り方で印象が変わる。見出しや内容を引き立たせる。文字だけよりイメージがしやすく(イメージが変わることも)色などでもその状況がイメージできる。
- 写真には新聞の内容を伝える力があり、写真によってどんなことを中心に伝えたいかが分かることを知りました。写真には大きな影響力があることを知りました。写真を使用するときにはどんな撮り方をすれば自分の伝えたいことを伝えられるかを考えて使用したいと思いました。

4 2013年度参議院議員選挙(7月4日公示・21日投票)の写真を比較・分析する授業

- (1) 対象生徒：中学2年生 3クラス(1クラス男20名 女子20名の40名)
 高校2年生 1クラス(男子19名、女子20名の39名)

(2) 教材の概要

① 2005年度 衆議院議員総選挙(8月30日公示・9月11日投票)の自民党の写真

右は、2005年に行われたいわゆる郵政選挙の際の、自民党のマニフェストの表紙である。当時筆者が教えていた私立の女子校では、小泉純一郎氏のこの写真が大変な人気であった。中には、自分のノートの表紙にこの写真を貼っていた生徒もいたほどである。ちょうど高校2年生を担当していたが、もし彼らに選挙権があったら迷うことなく自民党に投票していただろう。現代社会の授業で、新聞を読ませる活動がなされて



いたため、当時の自民党の政策について、生徒達にもある程度の知識はあったものと考えられるが、そうした教育を行っていたにもかかわらず、「写真のかっこよさ」に惹かれ、自民党を支持する生徒が非常に多かったことに衝撃を受けたことを記憶している。

暗い中に一方から光が差し込む背景は、ヒトラーの肖像写真を連想させる。ヒトラーとは逆に左を向いているものの、やや下から撮られたアングルはレーニンの演説写真を想起させもする。力強さと威厳をアピールさせつつ、強権的な印象を持たせないのは、全体の色が濃すぎないソフトなグレーの色調であるためだろう。

② 『売れる色の理由 事例で読み解くカラーマーケティング』

色彩が持つ効果について解説した本書の一部(p164-167)を抜粋して配布した。暖色系は暖かい印象を与え、寒色系はクールなイメージを演出するということはよく知られている。この資料には、それ以外にも、色の彩度によって派手か地味かが変わる、赤は進出して見え、青は後退して見える、色によって「重さ」の印象が異なる、白は膨張して見え、黒は収縮して見える、などといった色のもたらす印象の違いが色の実例と共に

詳しく掲載されている。また、赤、青、黄色、緑、ピンク、白、黒といった色が、具体的に連想させるもの、象徴的に感じさせる感覚についても詳しく書かれている。

③ 2013年度 参議院議員選挙（7月4日公示・21日投票）のマニフェスト写真

インターネットの各政党のホームページから、それぞれのマニフェストの表紙に使われていた写真をダウンロードして使用した。前回の衆議院選挙に出た政党についてはその写真も用意し、それと比較することでどのようなイメージ戦略の転換がなされたかについても考えられるようにした。

自民党は、どちらの選挙でも安倍晋三氏が大きく写されている。が、衆議院選挙の際には力強い表情をして下からのアングルで撮られていたのに比べて、参議院選挙では正面から撮影されており、微笑みを浮かべている。視線も、衆議院選挙では斜め上を見上げているのに対し、参議院選挙では正面から有権者を見つめるようなものになっている。

一方、民主党の写真は、衆議院選挙の時には「政権交代」という大きな赤い文字と共に、画面からはみ出るほど大きく党首の鳩山由紀夫氏の顔が厳しい表情でこちらを見つめる構図だったのが、参議院選のものでは、真っ白な背景の中に小さく党首の海江田万里氏が左前方に向かって歩いているという構図である。

この二つの政党を比べただけでも、その政治的立場と打ち出そうとしているイメージがどのようなものなのかを考えさせるために充分示唆的なものである。しかし、選挙の直前に授業で扱うという状況を踏まえて、選挙に関わる全ての生徒の写真を用意し、分析の対象をその中から班で自由に選ばせることとした。

(3) 授業の流れ

① 2005年度衆議院議員総選挙の自民党ポスターを提示し、若者の反応について話した。

② 色の与えるイメージや効果についての資料（『売れる色の理由 実例で読み解くカラーマーケティング』C&R研究所 2009年より抜粋）を提示し、2013年度 参議院議員選挙（7月4日公示・21日投票）のマニフェストに採用された写真について、主に色に注目した分析を行わせた。

授業における分析では、さすがに中学生よりも高校生の方が鋭い意見が多数出た。しかし、中学2年生はこれまでに2回のフォト・リテラシーの授業を行った効果が現れて、先に述べたような撮影の角度や背景、背後に差し込む光の意味などに言及しながら、写真に込められた意味を抽出していたのに対し、それまで写真について特に扱ってこなかった高校2年生は、政党の政策や政治的な立場についての知識と関連させた発言が中心となっていた。

③ ワークシートに写真の持つ力について書かせた。

(4) 生徒のワークシートから

最後に、生徒の書いたコメントを引用して本稿を閉じたい。授業では、高校生の方がより政治的な意図を汲み取る姿勢を見せていたが、書かれたものを見ると中学生でも授業で学んだことを発展させ、写真を始めとした視覚的なイメージの持つ政治性に自覚をもつよ

うになった生徒が多くいたことがわかった。授業者の意図がしっかりと伝わったと実感している。以下にそのいくつかを挙げる。

【中学2年生】

- マニフェストや公約の表紙によってその政党のイメージが定着されるかもしれない、と考えた。ふつうの写真でも似たようなことが起こっていると思う。例えばある国の写真を見せてもらって、きれいだなと感じたが、実は写真に写っているところはほんの一部で、あとのところは汚かった、などのことが挙げられる。一番大切なのは写真などに惑わされずに、確実に信じられる情報を集めることだと考えた。
- このマニフェストで党全体のイメージや役割、うったえたいこと全てが表れる。ニュースをあまり見ない人は、街を歩いている時に壁に貼ってあるそのときのインパクトで選みたい党が変わることもあると思うので、とても大事だと思う。そして写真、色、デザインによってもたらすものは全然違うということもよくわかった。
- それぞれ、色、表情、形によってインパクトや印象がちがうことを知りました。マニフェストは、人の表情を多く活用している所が多くあってびっくりです。こんなにも人の表情に私達が左右されていることを改めて知れたような気がします。また色では、ただリラックスする色を使って効果があるのかなと今まで疑問に思っていたので、今日授業でみんなの意見を聞いてよかったです。
- 色使い、顔の表情、字体などで人に与える印象が違うなどと思った。党によってねらう年代や、性別などが違うのだと思った。やはり一番大事なのは「マニフェスト」を手にとったり「党の政策」について調べようなどと思う印象だと思った。第一印象を大事にすることがポイントだと思った。

【高校2年生】

- 深く一枚一枚を見ていくと、様々な意見がでてきて、なるほどと思ったが、よくよく考えてみれば、人は見た時、そのようなことをすべて感じているのではないかと思った。普段何も考えずに見ている様々なものは自然に色や写真、デザインによって知らぬまに印象を植えつけられていることには、おどろいた。
- 公約の内容をごまかしたり、ぼかしたりするために写真や色づかいが工夫されていると思った。前回の写真と今回の写真を比較することで公約や党の変化が感じられる。若者狙い、若さを全面に出す、リラックスしているなど、さまざまな狙いにより、必死に党を生き残らせる役割を持っている。
- 写真の印象やイメージが色やレイアウト、アングルによってかなり違いができるので、その党のイメージや印象が写真によっては全く違うものに変えることができると思った。政策や党の本当の姿と写真による党のイメージが必ずしも一致するとは限らないということを忘れないでおきたいと思った。
- 今回の写真だけで考えずに、前回の写真との差から今回の選挙の様子や、次回への気持ちなどが読み取れると考えた。とくに若者は第一印象で決めてしまう人が多いと思うので、写真のイメージで人気を左右されるのも分かる気がする。
- 目線により「前進」「向き合う」というメッセージを、光源の位置によって「潔白」「希望」という印象を、ポーズにより「力強さ」や「主張」を、服装により「コントラスト」「清潔感」「人物のカリスマ性」などを表せることがわかった。

-
- i 水越伸 東京大学情報学環メルプロジェクト『メディアリテラシー・ワークショップ 情報社会を学ぶ・遊ぶ・表現する』2009年 東京大学出版会 など
 - ii 小林美香『写真を〈読む〉視点』2005年 青弓社
 - iii 鳥原学『日本写真史（上）幕末維新から高度成長期まで』2013年 中央公論新社
 - iv 新藤健一『新・写真の読み方 写真のワナ』1984年 情報センター出版局
 - v 今橋映子『フォト・リテラシー』2008年 中公新書
 - vi 鈴木みどり「メディア・リテラシーとは何か」 鈴木みどり編『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』1997年 世界思想社
 - vii アラン・ジョベール著 村上光彦訳『歴史写真のトリック 政治権力と情報操作』1989年 朝日新聞社